

アートベース・リサーチとフェミニズム

—理論と実践—

慶應義塾大学大学院

中村香住

1 目的と背景

この報告の目的は、科学言語の代わりに広義のアートを研究のベースとするアートベース・リサーチ (Arts-Based Research、以下 ABR) という新しいリサーチパラダイムと、フェミニズムの関係性について考察することである。フェミニズムは、つねにアートに影響を与え、そしてアートの影響を受けてきた。その証左として、Judy Chicago 《The Dinner Party》 (1979) をはじめとしたフェミニスト・アートの興隆が挙げられる。このようにアートと切り離せない関係性を切り結んできたフェミニズムは、ABR とともに親和性が高いと想定される。例えば、ABR のパラダイムでフェミニズム研究を行うことで、科学言語によっては掬い取り切れない女性たちの生の経験や感情をよりそのままの形で主題化させることが可能になり、さらなる研究成果を挙げるのではないかと期待される。このような前提を踏まえ、「フェミニスト ABR」という新しい分野の可能性を探る。

2 方法

まず、ABR とフェミニズムの親和性について、理論的な考察を行う。その際、日本で初めて ABR と社会学との接続を試みた岡原他 (2016) にて提出された、三つの位相の身体 XYZ 図式を用いる。この XYZ 図式は、ABR に携わる身体として、研究をする身体 (X)、研究に協力する身体 (Y)、研究成果を経験する身体 (Z) の三つを想定し、研究の総体のなかで X/Y/Z はそれぞれに関わり合い、重なり合うとするものだ。この図式の特に Z に着目することで、フェミニスト ABR が既存のフェミニスト・エスノグラフィーの乗り越えを行っている可能性を検討する

次に、実際に「フェミニスト ABR」という枠組みで行われた研究実践を紹介し、検討する。国外では、Darlene E. Clover がキーワードとして“feminist arts-based research”を挙げた論文を著したことに端を発し (Clover 2011)、それ以後はフェミニスト ABR を冠した研究や授業が各所で展開された。一方国内ではフェミニスト ABR を冠した研究はないが、日本にもフェミニスト・アート・アクティビズムの歴史はある。中でも、例えばフェミニズムとレズビアンをテーマにパフォーマンス・アート活動を続けているイトー・ターリの実践は多分に ABR 的である。こうした国内外のフェミニスト ABR 実践及びフェミニスト ABR と近似的であると思われる実践の中から、いくつかを概観し、そのなかで ABR とフェミニズムがどのように結びついて相乗効果が生まれているのか、内実を検討する。

3 結果と結論

分析の結果、フェミニズムと ABR はその出自やスタンスに共通点が多く、フェミニズムの研究を ABR の手法を用いて行うことで、既存のフェミニスト・エスノグラフィーが抱えていた問題点のいくつかを乗り越えることができることが確認された。また、フェミニズムと ABR の思想には「共感」「共同」「連帯」「信頼」「対等」「主観」「感情」「経験」「相互的」「再帰性」「プロセス重視」など多くの共通するキーワードがあり、共働して行えることがたくさんあると考えられる。

文献

岡原正幸・高山真・澤田唯人・土屋大輔, 2016, 「アートベース・リサーチ 社会学としての位置づけ」『三田社会学』21: 65-79.

Clover, D. E, 2011, “Successes and challenges of feminist arts-based participatory methodologies with homeless/street-involved women in Victoria,” *Action Research*, (91): 12-26.